

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて

LEXUSが掲げる「二律背反を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト」。

京都府選出の匠、河原尚子さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)が、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏建築家/東京大学教授、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロジェクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主権のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年度、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



プロダクトへの思いを語る

訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの試作に取り組んだ。

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをプレゼンテーション。

世界へ羽ばたく足がかけとなる大きなチャンスを手にした。

また、商談会の終盤ではチームスキャンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。



バイヤーと商談する河原さん

「伝統」を守りながら新しい「感覚やテクノロジー」を吹き込む。

「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律背反を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト」。

京都府選出の匠、河原尚子さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

和文を再認識するきっかけに

ライフスタイルが欧米化し、和室のない家に住む人も増えている現代は、襖を知らない子どももいるという。そんな時代だからこそ、あえて襖の「引手」に挑戦した河原さん。「ニッチな建具部材ですが、説明すると驚いたり感心する方がおられます。存在を知られば、これから建物を鑑賞するポイントになったり、空間を見る目が変わるかも。日本文化の教育の、そんな一助にもなるのではと考えました」と、河原さんはいう。



「襖引手」を収めるBOOKと冊子にも素材と技法の粋が詰まっている

物語で暮らしを豊かにする

自ら手がけるブランドのテーマ『読むプロダクト』を落としこんだ引手は、収納する箱や用いる襖にもこだわり、隅々まで芸術性と物語性に満ちている。鮮やかな絵に彩られたブック型の箱を開くと、裏表紙には伊勢型紙で胡粉を盛り上げ立体感を出した円紋が浮かび上がる。ページ部分には、白・赤・青の縁に囲まれた磁器の引手が納まっている。白には生命の源である海、赤には植物、青にはこれらに育てられた青虫が蝶となって飛翔する、そんな物語が



繊細な手作業で給付けされる器

こめられているのだ。

河原さんは茶陶である真葛焼の窯元に生まれた。家業は兄が継ぐので自身は家から離れ、職業訓練校で基礎を身に付けたのちに佐賀県の陶板画作家に弟子入り。帰郷してからは、陶板画作家の活動しながらデザインスキルを高めるため、ウエブデザインの会社にも勤めた。そこで改めて家業を見つめ直すと、物語のある器や室礼で客人をもてなす茶道の素晴らしさに深く感銘したそう。

そこで、陶板画はもとより暮らしを彩るものづくりを志し、器を中心に京友禅などともコラボするブランド『STONE(シオネ)』を2009年に立ち上げた。店舗では自らの器を用いたカフェも併

大勢より、一人でも深く愛される作品

「引手」というのは数奇屋の空間に見所をつくる道具で、こだわりの出せるものです。唐紙や表具の職人さんとも息

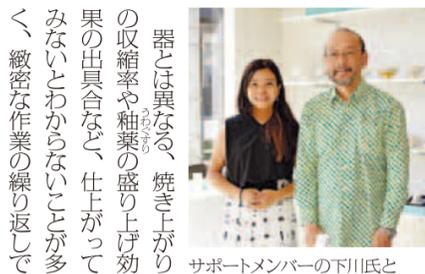


河原 尚子
京都/陶板画作家・陶磁器デザイナー

京都府出身。茶陶の窯元「真葛焼」に生まれる。佐賀での陶芸の修行の後、2005年より独特の技法での陶板画制作をはじめ。2009年、プロダクトブランド「STONE(シオネ)」を立ち上げる。陶板画制作・デザイン・老舗のブランディングやアートプロジェクトなどを通じて、もてなしの時間や空間を創造し、国内外で作品を発表している。



完成プロダクト「ものがたりのある(襖引手)」



サポートメンバーの下川氏と

器とは異なる、焼き上げりの収縮率や油葉の盛り上げ効果の出具合など、仕上がってみないとわからないことが多く、緻密な作業の繰り返しで

「普段は、京都を拠点に各地の良いもの、良い技をつなげ世界へ発信していく為のものづくりを考えています。今回はすべて京都の技術を用いて制作でき、地元へ少し恩返しできたかなと思います。地元の良いものをつくらうと志す全国の仲間に出会えた、本プロジェクトには感謝しています」と、河原さん。これらも地域や業種の垣根を越え、うまへミックスしていけば、新しいMade In Japanができるのではと意気込んでいる。



の合った作業をして、みんなのすごい技を一つにして見せられたと思います」と、河原さんはいう。

構想を提出したとき、下川氏は「引手というのは、今までの匠になかった発想だからいい」と激励してくれた。だが、プロダクトとなると、幾つ売れるかわからないのが悩みどころだ。しかし下川氏の、「作品」として考えれば、たとえ一つしか売れなくても、その人が気に入って大切に愛用してくれればいいんじゃないか。引手を取り巻く空間が、アート作品になるようなものをつくれればいい」とのアドバイスを聞いて、道がはっと開けたそう。

注目の匠として
新しい「日本製を

プレゼンテーションでは物語性があることも高く評価され、サポートメンバーの清川あさみ氏の推薦で全国の51名中わずか4名という「注目の匠」に選出されたのだ。

河原 尚子
京都/陶板画作家・陶磁器デザイナー

物語のある空間に暮らす、それは人生を豊かにつむぐ一つの情緒。